

雪おそき冬

『新壘』
26-2号

夜の灯にラヂオ組立てゝゐる少年の影よ母吾よりも矮さし

虐ぐるまでに子を戒めてさびしめり負目の如き母の座にゐて

埃くさき頭撫でつゝ子を寝せをりぬ今宵美しき母と思はれむ

無気力な夕べの吾よ冬空に動かぬ雲の限界をしらず

朝より強き風吹く窓下に砂塵がくるめきぬ雪おそき冬

枯原に真白きものゝ敷かれゆく無限の静寂にたじろぐ吾か

占ひ

『新壑』
26-3号

夜の時間吾が持つがぎりはトランプに占ふ未来も愛さるゝらし

甘やかされ幼児期を經し少年の近づく反抗期いつとなく恐れぬ

罪持たばその報もあるべしと憐まること否む日もあらむ

追従するのみにし生くる一生かとルージュひくときふとはかなみぬ
よ

幾日も赤きセータ千され窓より聞ゆはチャツくチャのリズム

どの窓よりも同じメロデーの流れくるこの奥露路にも倖はあらむ

不安定に

『新壘』4
26号

吾が心定まらずあれば藻にひそむ金魚の形捉へ難しも

鮮やかに尾を反す金魚意志持たぬ吾に少しの妬心を煽り

照りまた翳りつぎくかはる終日を障子へだてゝ安穩にこもる

不安定に生くる口々にもためらはず降り積りたる雪の尺度よ

人一人偽りて投函せし封書の重みよ冷えし掌に残り

歩く吾と自転車に乗る君との距離ひろがりて夕べの風の冷たし

春の窓

『新壑』6
26号

朝より頬にきびしく触るゝ風春は時折偽りを持つ

春の窓に果実の匂ひ残す夕べ降り足らぬ程の雨の止みにき

自らを庇護して悔なき春の午後犬に羞しくもの云ひてをり
やい

灯火を消すにも氣力なき吾よ無条件に愛されざること気づけ
ば

寝に就けど易々とは夢に現れず吾がかなしみの浮きて見ゆるに

活けられしガーベラひそと部屋に匂ふ優しき錯覚に陥りし夜半

繋がれて草を喰む山羊の細ぎ目よ吾は平穩に日々を生きたし

歳度か壺の位置を置き変ふる君の自尊は今も養はるべし

リンゴジャム煮つめゐる夕べまぎれ来て尾を振る仔犬くりやに白
し

きょとれぬ程に吾をとりまく誹謗越えときしらずの小さき白き
花咲く

一週余を咲きつゞけきし黄の水仙黄昏の卓に位置を保てり

百合のしづかに開く過程も疑はず吾れ平凡に妻の座を占む

雨季故に保ちし壺のカーネーション紅なまくと咲くは妬まし

今日も又一つの嘘を重ねゆく未だ雨をはらみゐる空の表情

撫子の枯れたる花を捨てながら空壺の如きか吾れの孤独は

こころ

日暮れまで薪割る音に苛立ちぬこの感情さへ侘しと思ひぬ

湿りもつ土間にふれ合ひ飛ぶ蠅のこの終末もはかなかるべし

譲り合はぬ二人が黙す雨のあと溜りの水は夏陽に乾き

不実の光り放つ螢光燈の下拒む理由は何もなかりき

目を細め乳房吸はせるる母犬のこの充足も侵さざりにき

吾が怠惰をも見逃さざりき夏雲は窓より見ゆるかざり漂ふ

照りながらしぐるゝ空の氣まぐれよ妻と云ふ座に堪ふるか吾も

ポケットに入れし手に触るゝドアの鍵開かず帰る道にさみしみつ

ときしらずの花 『新壑』
26-11号

窓に置くときしらずの花の清潔に見ゆ愛の成就に未だ至らねば

危ぶまれるる愛の過程かときしらず最後の一つくまで咲かせ

なすことも無く孤独に疲れし午後降りたくてゐる雨を降らす
すべなし

日々寡黙となりゆく夫よ多年草の種子くろ土にしみこぼれつゝ

雲が覆ふ空よりジェット機の音の響きて吾のたかぶりもまぎれむ
か

